

# 各科活動報告



## 集中治療科

### 担当医

#### ○北山 仁士(集中治療科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／三学会構成心臓血管外科専門医・修練指導者／臨床研修指導医／医学博士／近畿大学心臓血管外科客員教授／堺市難病指定医

#### ○吉川 健治(集中治療科医長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医

#### ○杉山 円(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医・指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／日本心臓血管麻酔学会心臓血管麻酔専門医／臨床研修指導医

### 活動報告

ICUは全科の集中治療を担うgeneral ICUとして、人工呼吸器、IABP、PCPS(ECMO)等の生命維持装置を駆使した呼吸・循環管理、血液浄化療法による体液管理から、代謝・栄養管理まで、標準かつ最先端のICU管理を行っています。

専任医師に加え、心臓血管外科、循環器内科、呼吸器内科、麻酔科の協力のもと、多職種が一丸となり日夜良好なチーム医療を実践しています。

ICUでは、PCPS(ECMO)生還例が増えました。

ECPRの4例でPCPS(VA-ECMO)離脱(3例生存退院)

心筋炎のPCPS 1例離脱(入院中)

VV-ECMOが2例あり1例離脱(生存転院)

PCI後、PCPS症例、心外術後の肺高血圧に対するNO吸入を導入しました。

HCUではCOVID感染重症者の受け入れを継続し、COVID診療の一翼を担いました。

### 今後の展望と課題

診療体制については、医師1名の鳳クリニックへの軸足変更に加え、月水のバックアップを別の医師に依頼して引き継ぎ進行中。

担当主科との連携強化については、以前から入室患者担当主科との連携強化をアピールしており、少し改善傾向は認められますが、まだ不十分なため、更に協力要請が必要であると思います。

## 総合診療センター

### 担当医

#### ○藤本 卓司(救急総合診療科部長)

認定資格：ICD(Infection Control Doctor)／麻酔科標榜医／京都大学医学部臨床教授／臨床研修指導医／堺市難病指定医

#### ○大矢 亮(副病院長 兼 総合診療センター長 兼 救急総合診療科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医JMECCインストラクター／日本プライマリ・ケア連合学会指導医SDH検討委員会委員／日本病院総合診療医学会認定特任指導医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／日本救急医学会ICLSディレクター・インストラクター／大阪府医師会ACLS大阪認定ディレクター・認定インストラクター／臨床研修指導医プログラム責任者／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了／日本老年医学会高齢者医療研修会修了／HANDS-FDF2014修了／認知症サポート医／日本HPHネットワーク運営委員／堺市難病指定医／大阪医科薬科大学臨床准教授

#### ○奈良 健司(血液内科部長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本血液学会認定血液専門医・指導医／臨床研修指導医

#### ○藤本 翼(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／大阪府医師会ACLS大阪認定インストラクター／臨床研修指導医／堺市難病指定医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了

#### ○井上 剛(救急総合診療科医長)

認定資格：日本救急医学会救急科専門医

#### ○杉本 雪乃(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／JMECCインスト

ラクター／日本救急医学会ICLS認定ディレクター／大阪府医師会ACLS大阪認定ディレクター／JPTEC  
プロバイダー／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了／HANDS-FDF2011修了

#### ○河村 裕美(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本専門医機構総合診療専門研修特任指導医／JMECCインストラクター／日本救急医学会ICLSインストラクター／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了

#### ○松瀬 房子

認定資格：日本内科学会認定内科医／認知症サポート医／社会福祉士／NST医師教育セミナー修了

### 活動報告

2022年4月に救急専門医が着任し、救急と重症管理の医療と教育が質と量の両面で大きく向上する一年となりました。救急搬送数は過去最高の6,234件であった2021年度をさらに大幅に更新し7,669件でした。病棟チームでも前年度終盤からCOVID-19を中心に成人患者の診療に加わってくれていた小児科医師が9月から本格的に病棟の診療と教育に加わり、同時期から内科専攻医3年目医師も外部研修から戻って来たことで例年よりも安定した体制となりました。

その結果、COVID-19以外の担当入院患者数は前年度430名から529名とこちらも大幅に増加しました。教育面では延べ人数で14人の初期研修医、8人の後期研修医、3人のクリニカルクラークシップ医学生を受け入れました。教育面の大きな変化は後期研修医が年間を通して在籍したことで後期研修医を含めたチーム制を安定的に運用し、後期研修医にも教育を担ってもらう体制を取ることができました。

### 今後の展望と課題

2020年度からの3年間は新型コロナウイルス感染症への対応が中心にならざるを得ませんでした。2023年度は新型コロナウイルスが感染症法第5類相当に変更となることで院内・地域・社会の変化に対応し医療と教育の質を高めるために、総合診療センターを救急総合診療センターと改変し再始動します。センターに所属する医師は重症管理も含めた病棟、ER、総合診療センター外来、クリニックの外来と訪問診療という幅広いフィールドでチームとして診療と教育に従事します。

センターとして機能的につながることで各部門の連携を強化し、看護をはじめ他のメディカルスタッフと一緒にさらなる医療の質の向上を目指します。その上で活動を積極的に発信することでジェネシャリストとして働きたい医師や、研鑽を積みたい医師の獲得や育成につなげていきます。具体的な取り組みとして内科専攻医とともに総合診療専攻医の積極的な獲得に努めます。また、2024年度から本格的にスタートする医師の働き方改革に向けて、医療・教育の質の維持と医師の持続可能な働き方の両立を確立します。

## ● 循環器センター(循環器内科)

### 担当医

#### ○石原 昭三(副病院長 兼 循環器センター長)

認定資格：日本内科学会認定内科医 総合内科専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医・指導医／日本心血管インターベンション治療学会専門医・施設代表医／臨床研修指導医／堺市難病指定医／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)

#### ○鈴鹿 裕城(循環器内科部長)(~2022.6)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医／日本心血管インターベンション治療学会専門医／堺市難病指定医

#### ○具 滋樹(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本循環器学会循環器専門医・指導医／臨床研修指導医／心臓リハビリテーション指導士／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)／堺市難病指定医

#### ○松岡 玲子(循環器内科医長)(~2022.5)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本循環器学会循環器専門医／植え込み型除細動器(ICD)・ペースングによる心不全治療(CRT)実施医

#### ○橋本 朋美(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医総合内科専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医／日本心血管インターベンション治療学会認定医／日本高血圧学会専門医・指導医／植え込み型除細動器(ICD)・ペースングによる心不全治療(CRT)実施医／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)／臨床研修指導医／堺市難病指定医／NST医師教育セミナー修了

#### ○鷺見宗一郎(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医

#### ○宮部 亮

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本循環器学会循環器専門医／日本心血管インターベンション治療学会認定医

## ○南里 直実

認定資格：日本内科学会内科専門医

### 活動報告

2022年はPCI558件、アブレーション73件、PTA73件であった。複数のスタッフ医師の退職およびCOVID-19感染症への対応と急性期医療の両立を求められる中でも症例数を維持することができた。これまで受け入れ、育ててきた若手医師の成長と活躍によるものである。

### 今後の展望と課題

#### 1) カテーテル治療のさらなる発展

PCI症例数は頭打ちになってくると思われるが、アブレーション、EVTはまだまだ伸びしろがある。カテ室の増室が早急に求められる。

#### 2) 不整脈学会専門研修施設認定の取得

専門医取得により、2024年以降の施設認定を目指している。

#### 3) structural heart diseaseへの対応

カテーテルによる弁膜症治療(TAVIなど)が普及しており、高齢者の心不全治療を考える上で将来的には当院でも実施できることが求められる。ハイブリッドオペ室の導入と、心臓外科手術症例数の増加が今後の課題である。

## ● 循環器センター(心臓血管外科)

### 担当医

#### ○井上 剛裕(心臓血管外科主任部長)

認定資格：日本胸部外科学会認定医／日本外科学会外科専門医／三学会構成心臓血管外科専門医・指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)／堺市難病指定医

#### ○金田 敏夫(心臓血管外科部長)

認定資格：日本外科学会専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医／三学会構成心臓血管外科専門医・指導医／臨床研修指導医

### 活動報告

2022年度の開心術を含めた心臓血管外科手術症例は、例年よりやや少なく経過しました。周囲施設との連携や、近畿大学病院からの術後リハビリ目的入院受け入れも一定数あり、外来は他院からのフォロー依頼例もみられました。地域連携部門・サポートチーム・病棟の医療スタッフは、矜持をもって日々協働し、医療サポートも円滑に行っていました。

ウィズコロナのなかで、外科治療も感染対策の継続的な努力が求められています。当診療科も幸い不具合なく、術前からの周術期管理を安全に行い、退院、外来へとシームレスにつながることができました。

心臓血管外科専門医基幹施設として認定され、一般社団法人NCDが実施するデータベース事業及び、日本成人心臓血管外科手術データベース(JCVSD)に継続参加しています。

### 今後の展望と課題

術後早期回復、在院日数の短縮、術後の生活の質を良好に維持できるように、手術の低侵襲化に重きが置かれるようになりました。当院も、弁膜症に対する低侵襲手術としてのMICS治療が始まり、弁膜症手術の治療選択肢が、幅広くなることが期待されます。一方で、低侵襲治療が適応にならない高齢の患者さんも多く、様々なサポートを含めた治療介入を行い、術前の状態を良好なものとし、術後の生活の質を維持する手術、周術期管理を目指していきます。

長寿化、超高齢化が進むなかで循環器疾患は、家族の介護負担が必要となる比率が高く、医療費が最もかかるため、その対策強化は喫緊の課題です。心臓血管外科治療が、事後的な対応から予防的に行うことで介護介入を軽減し、医療費の効率化や低減に貢献できればと考えています。

コロナの流行も4年目に入り、また少子高齢化、情報化社会が進み、価値観の相違や権利意識が益々もって強くなっています。エビデンスに基づく医学情報、手術治療の提案、患者さんやご家族の価値観、意向、懸念を共有し、循環器治療をすすめていきます。医療新時代の変化に応じた地域病院として、患者さんとご家族、医療スタッフを含めた対話を重視した心臓血管外科治療を行っていきます。

# 消化器センター

## 担当医

- 山口 拓也(副病院長 兼 消化器センター長)  
認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本内視鏡外科学会技術認定医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・消化器がん外科治療認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医
- 岩谷 太平(消化器内科部長)  
認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医・指導医／日本消化器病学会消化器病専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医
- 岡田 正博(消化器内科部長)  
認定資格：日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肝臓機能障害)／堺市難病指定医
- 松田 友彦(消化器内科医長)  
認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／臨床研修指導医
- 河村 智宏(消化器内科医長)  
認定資格：日本内科学会内科指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／臨床研修指導医／日本救急医学会ICLSインストラクター
- 平林 邦昭(大腸・肛門科部長)  
認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(小腸機能障害)(膀胱又は直腸機能障害)／堺市難病指定医
- 吉川 健治(肝胆膵外科部長)  
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肝臓機能障害)
- 戸口 景介(外科部長)  
認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／厚生労働省認可麻酔科標榜医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医・消化器がん外科治療認定医／日本ヘリコバクター学会H.Pylori(ピロリ菌)感染症認定医／日本腹部救急医学会腹部救急認定医／麻酔科標榜医／堺市難病指定医
- 外山 和隆(副病院長 兼 外科部長)  
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医
- 中江 史朗(腫瘍内科部長)  
認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医／日本消化器内視鏡学会消化器内視鏡専門医／日本大腸肛門学会専門医・指導医／日本消化器病学会専門医／日本東洋医学会漢方専門医／日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／医学博士
- 中川 朋(消化器外科医長)  
認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医・消化器がん外科治療認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医
- 今井 稔(消化器外科医長)  
認定資格：日本外科学会外科専門医／臨床研修指導医／堺市難病指定医
- 土居 桃子  
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医
- 櫻井 史歩  
認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／臨床研修指導医
- 池田 響  
所属学会：日本内科学会／日本消化器病学会／日本消化器内視鏡学会／日本病態栄養学会
- 坂本 祥大(後期研修医)
- 山田 淳史(後期研修医)

## 活動報告

消化器センター(内科)は上部、下部消化管の出血に対しては24時間365日緊急対応する体制を敷き、コロナ下であっても治療数は維持されており堺市内の医療向上に寄与しました。悪性疾患等による消化管閉塞に対してはステント治療を広くとりいれ、速やかな手術療法への移行を行い低侵襲な治療を可能にしています。胆道系疾患に対する定期、緊急ERCPも数年間過去最高記録を更新し続けています。

消化器センター(外科)では消化管外科、乳腺甲状腺外科、ヘルニア外科などを主に行っています。腹腔鏡

下手術が大勢を占めており、胃、大腸など腹腔鏡下にて手術を行っています。直腸癌に対しては集学的治療を取り入れています。前方手術のみならず、経肛門アプローチを用いたTPE症例(TaTPE)でも可能な症例には肛門温存を行なっています。2022年度には巨大食道裂孔ヘルニアに対する腹腔鏡下根治術も施行し良好な経過を得ました。乳腺領域では全国統計と同様に乳がんの諸例数が大幅に伸びています。地域の開業医の先生からの紹介も多くなり、期待に応えるべく奮闘しております。

## 今後の展望と課題

- 1) がん診療をさらに充実させ、集学的治療、2期工事を行い放射線治療導入を行って参ります。新規技術導入を行いロボット手術を導入します。
- 2) 高度専門的な治療を拡充し専門スタッフの更なるスキルアップを行い患者さん満足度の高い医療を提供して参ります。
- 3) 全職種横断的な総合カンファレンスを毎週開催し、より一層、患者さんやご家族の想いを充分かなえられるような治療をチームで提案します。
- 4) 上部、下部消化管、肝胆膵分野ごとのエキスパートの育成を行い、患者さんにさらに質の高い治療を提供しつづける努力を継続して参ります。
- 5) 腫瘍内科、緩和ケアチームと密接に連絡をとりあい、漢方治療などの補完医療もとりいれ、質の高いケアを提供します。

# 乳腺外科

## 担当医

### ○小田 直文(乳腺外科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本乳癌学会乳腺専門医・指導医／検診マンモグラフィ読影認定医(AS評価)  
乳房超音波医師講習(A判定)／医学博士／臨床研修指導医／日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会乳房エキスパンダー・インプラント責任医師／HBOCコンソーシアム教育セミナー受講

### ○裕野 孝治

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医

## 活動報告

2022年4月に日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会の乳房再建に関する施設認定を取得し、当院で乳房再建術を実施できる体制を整備しました。近畿大学病院から形成外科医を招聘し、乳癌の手術と同時に組織拡張器(ティッシュエキスパンダー)を挿入する一次二期再建を主に開始しました。同手術を4月と12月に、合計2件実施することができました。さらに、広範囲な皮膚欠損が生じた腫瘍径の大きい乳癌治療切除時に、これまでは植皮という選択肢しかありませんでしたが、一期的に閉創できない皮膚欠損を補う目的で、一次一期再建の手技である広背筋皮弁を用いた乳房再建を、8月と1月に合計2件実施することもできました。植皮による皮膚欠損を補う手法より患者さんの回復が早く、放射線治療による皮膚壊死の心配も少なく、早期に集学的治療に移行できるというメリットを享受することができました。また、組織検診科より依頼のあった放射線科枠の超音波(乳腺エコー)枠の増加に応えた成果として、2020年度171件、2021年度151件であったものが、エコー技師を育成しながら、467件(2022年2月末)実施することができました。さらに乳癌手術件数も2020年度50件、2021年度43件であったものが、2022年度は69件と約1.5倍の件数増加となりました。

## 今後の展望と課題

これまで当院では乳房超音波検査は検査技師ではなく、医師により行われてきました。スクリーニングは検査技師に、精査は医師にというタスクシフトに従い、乳房超音波検査を実施できる検査技師の育成を2022年より開始しました。検診精度管理中央機構(精中機構)の講習会を受講し試験に合格(A or B判定を取得)することで、乳房超音波検査を実施できる検査技師が誕生します。しかし、コロナ禍により精中機構の講習会が開催されない期間が続いていましたが、2023年度になり、ようやく中機構の講習会が開催されることになりました。まずは、当院での初の乳房超音波ができる検査技師の誕生を目指すとともに、複数名の検査技師が必要なことは明白です。今後の展望として、検査科と協力しながら第2、第3の乳房超音波検査を実施できる検査技師の育成に努めたいと考えています。

# 腎・透析センター(腎臓内科・透析)

## 担当医

### ○大矢 麻耶(腎・透析センター長 兼 腎臓内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本腎臓学会認定腎臓専門医・指導医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)／堺市難病指定医

### ○植田祐美子(腎臓内科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本腎臓学会認定腎臓専門医・指導医／日本フットケア学会認定フットケア指導士／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)／堺市難病指定医

### ○熊澤 実

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本腎臓学会専門医・指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)／堺市難病指定医

### ○林 研(非常勤)

所属学会：日本内科学会／日本腎臓学会／透析療法学会／日本下肢救済・足病学会／日本フットケア学会／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)

## 活動報告

腎臓内科分野では、高齢のネフローゼ症候群が増えてきており、高齢腎生検を検討しながら難治性ネフローゼに対応することが増えてきた。できる限り、合併症での悪化を避けるようそれぞれのニーズに合わせて治療を選択することを重視している。またネフローゼは全身状態の悪化が著しく、低栄養の廃用症候群に至ることが多く、退院までいきつけること、また退院後生活を維持することが多きな課題となる。リハビリと栄養を確保することを重視している。

透析分野では、新規導入が増え続けており、緊急導入も増え、導入後維持透析へつなぐまで多数の介入が必要になってきている。それぞれに丁寧な対応を心がけている。またシャントエコーの技術UPができ、シャントPTA件数がのびている。外来透析では、精神科医師をはじめ、他科との共同での診療が必要なが増えてきた。カンファレンスを繰り返し、様々な問題すべてにできるかぎりの対応を試みた。

## 今後の展望と課題

これまで当院透析をつくりあげてこられた2名の医師が退職となる。2023年度は新たに2名の医師を迎え、新体制となる。新しい力をかりて、新たな分野の開拓をしていきたい。また透析部門にとどまらず他分野との連携をさらに強化し、部門をこえての医療連携で、当院透析患者の医療を充実させていきたい。

# 代謝・膠原病内科

## 担当医

### ○川口 真弓(代謝・膠原病内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本糖尿病学会糖尿病専門医・指導医／臨床研修指導医／リウマチ登録医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)／堺市難病指定医

### ○岩崎 桂子(代謝・膠原病内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／臨床研修指導医

## 活動報告

関連が強い腎臓病グループと同じ病棟でチームとしてカンファレンス・回診を行い研修医の教育も行なっています。開業医からの紹介も受け入れ、入院及び外来フォロー等で連携を進めています。

### 【糖尿病内科】

#### ○2022年度診療内容

##### 入院患者の加療

- ・教育入院11日間、月に3回に変更(COVID-19流行に伴い中止期間もあり)
- ・糖尿病を基礎疾患にもつ重症入院患者
- ・外科系の各診療科の内科マネージメント

##### 外来患者の加療

- ・耳原総合病院 糖尿病紹介外来 母性内科(妊娠糖尿病を中心)外来



- ・サテライト診療所(高砂クリニック)での糖尿病外来
- ・堺北診療所の糖尿病外来
- ・南大阪糖尿病協会糖尿病ウォークラリー共催(去年は中止)

#### 【膠原病内科】

- ・初発の関節リウマチ、他血管炎など膠原病患者を研修医とともに診断、加療を行っています。また外来フォローも行なっています。
- ・膠原病を基礎疾患にもつ患者さんの感染症などでの入院時の対応も行なっています。

#### 今後の展望と課題

初期、後期研修医もローテートで回ってくるが増え、カンファレンスも活気が出てきました。糖尿病診療のスキルを生かし急性疾患のみならず、慢性疾患を診ることのできるチーム医療を目指し、その楽しさを研修医の先生にも経験してもらえるような研修システムを作って行きたいと思えます。

外来通院の妊婦さんの糖尿病、甲状腺治療を専門医がフォローし、安全な分娩につなげるため妊娠糖尿病外来を開設しています。外来部門との合同カンファレンスなどを通じて更なる連携を深めると共に開業医の先生との関わりも深めていくことで、多くの患者さんが安心して病気と付き合っていけるよう支えていきたいと思っています。

## 呼吸器外科

#### 担当医

○佐藤 泰之(呼吸器外科部長)

認定資格：医学博士／日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会認定医／ICD(Infection Control Doctor)／臨床研修指導医／身体障害者福祉法指定医師(呼吸器機能障害)

#### 活動報告

呼吸器外科の手術件数は、2019年度55件、2020年度は70件と増加しましたが、2021年度は57件と減少し、今年度はさらに42件と減少しています。手術室の緊急事態宣言での手術枠制限や病棟閉鎖の影響によるものと考えられます。内訳は、肺癌などに対する肺葉切除術が13件(2021年度20件)、肺癌(8件)や肺転移(6件)などに対する肺部分切除術が15件(同12件)、気胸の手術が7件(同12件)、膿胸に対する手術が3件(同3件)、縦隔の手術が2件(同6件)、手掌多汗症に対する交感神経遮断術が2件(同0件)となります。それら全ての手術を完全鏡視下での胸腔鏡手術で行っており、緊急開胸例もなく安全な手術が行われています。なお、胸腔内の強固な癒着に対して安全担保のための開胸移行が1件あります。また、問題となる術後合併症はなく、再手術例(2021年度1件)もありませんでした。ただ、術後経過良好の中突然の心肺停止(手術との因果関係は不詳)での死亡退院が1例ありました。

今年度の特異な傾向としては、比較的早期で肺葉切除さえできれば肺癌を根治できる状況ながら、あまりに呼吸機能が悪いために部分切除すら手術をすることができない症例が目立っていました。

総括としては、手術の要としたところの肺癌に対する肺葉切除術が減っていることは前記の呼吸機能の問題もありますが、症例の確保の問題もあり検討を要すると思われます。一方ではコロナ禍が落ち着き手掌多汗症の手術が再開できたことでその増加も期待したいと思えます。また、今年度より全身状態不良で全身麻酔が厳しい膿胸の症例に対してベッドサイドでの局所麻酔+鎮静下での胸腔鏡下膿胸手術も導入(前期のうち2例)しています。

引き続き手術助手については非常勤の呼吸器外科医による応援があり、安全かつ手術時間の短縮が実現できています。

#### 今後の展望と課題

現在の手術枠や助手体制の中で安全かつ適切な手術を行う上では、手術件数は2020年度くらいが最大限かと思われます。そこまでの回復が当面の目標ではありますが、それには準緊急手術に関しての手術枠や手術助手を考えていかないといけないと思われます。

# 小児科

## 担当医

○藤井 建一(小児科部長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医・指導医／臨床研修指導医／堺小児科医会理事／堺市難病指定医

○瀬戸 司(小児科医長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／臨床研修指導医

○瀬邊 翠

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／臨床研修指導医

○阿曾沼良太

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／JPLS小児診療初期対応コース修了／NCPR Aコース修了

○佐藤結衣子

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／臨床研修指導医

○安田のぞみ

認定資格：日本小児科学会小児科専門医

○五嶋 領

所属学会：日本小児科学会／日本小児神経学会

○山川 康平(後期研修医)(～2022.9)

○竹内 彩華(後期研修医)(2022.10～)

## 活動報告

小児科医師としては、昨年度と同じ医師体制でした。9階病棟は、2020年7月より、小児科・整形外科・内科との混合病棟(33床)で運営していますが、小児については、入院患者数がコロナ前の3-4割程度と伸び悩んでいます。COVID-19感染症の第7波、第8波と次々に感染の拡大が起り、小児のコロナ患者もかなり増加しましたが、コロナ以外の入院患者数は伸び悩んでいます。また、7年前から始めた重症心身障害児者のレスパイト入院(スマイルケア入院)も、COVID-19感染症のリスクを避けるために、今年度もかなり受け入れを制限し(1日1名)、需要にお応えすることができませんでした。

6階の産婦人科病棟では、2020年7月よりNICU(新生児集中治療室)を3床開設し、当院出生の新生児を状態が悪化する前に治療介入して対応しています。出産数については、月に65名前後と昨年同様高い水準を維持しており、24時間体制で新生児医療には力を入れています。また、初期研修医の小児科研修も常時2-3名受け入れており、病棟医療を中心に研修指導しています。

救急対応としては、救急車や開業医・急病診からの紹介については、24時間365日受け入れ態勢を整備して、地域の小児救急に少しでも役立てるように対応しています。また、土日祝日の午後(13-17時)の時間帯については、電話での確認が前提で、一般の救急患者の診療も実施しています。

## 今後の展望と課題

この3年間のコロナ感染症の影響は甚大で、特に小児の入院については大きな影響を受けましたが、この5月にコロナが感染症法の5類に再分類され、少しずつコロナ前の状況に戻っていくことが予想されます。早速、この4月から5月にかけては、発熱患者も多く入院を要する小児も増えてきています。開業医の先生方からのご紹介は積極的に受け入れていく方針としていますので、お気軽にご紹介いただきたいと思います。

また、感染症だけでなく、食物アレルギーや低身長症等の検査入院も実施していますので、地域連携室の方へ是非ご相談ください。レスパイト入院についても、2022年4月から、1日1名に限定して、再度受け入れを再開していますが、今後、コロナ感染の収束を見極めて安全の確保が確認出来次第、1日4名まで定員を増やしていく予定としています。外来としては、365日24時間、地域の子どもたちに対応できる様な救急外来を目指して、体制作りを進めていく方針です。

## 2022年度 疾患別統計

小児科入院数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
2022年度	59	55	43	60	45	37	69	50	38	60	49	48	613

## 2022年度 上位疾患

疾患名	件数
妊娠期間短縮、低出産体重に関する障害	218
急性気管支炎、急性細気管支炎、下気道感染症	48
上気道炎	44
食物アレルギー	39
てんかん	34
ウイルス性腸炎	27
喘息	21
その他の感染症(真菌を除く)	20
川崎病	12
詳細不明の損傷等	10

## 周産期ファミリーセンターおよび産婦人科

### 担当医

- 坂本 能基(副院長 兼 診療部長 兼 周産期ファミリーセンター長 兼 産婦人科部長 兼 緩和ケア科部長)  
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医／日本女性医学学会認定女性ヘルスケア専門医・指導医／日本東洋医学会漢方専門医／母体保護法指定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／堺市難病指定医
- 内田 学(検査科部長)  
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／母体保護法指定医／麻酔科標榜医／日本乳がん検診精度管理中央機構マンモグラフィ読影認定医／産業医／堺市身体障害者福祉法指定医師(小腸機能障害)(膀胱又は直腸機能障害)
- 松岡 智史(産婦人科医長)  
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医／日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／日本周産期・新生児医学会新生児蘇生法専門コース(Aコース)修了
- 高木 力(産婦人科医長)  
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／母体保護法指定医／臨床研修指導医
- 瀧口 義弘  
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／母体保護法指定医師
- 松原 侑子  
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／臨床研修指導医
- 下向 麻由(2022.8～)  
認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医／日本内視鏡外科学会産婦人科技術認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医
- 黒部 貴子(後期研修医)

### 活動報告

《産科》 妊婦から見た当院の魅力である以下の点を特に意識して取り組みました。

- ・総合病院であり、安全、安心、信頼がある  
帝王切開率は一般病院と比較して低いが、新生児仮死が少なく、安全・安心・信頼のお産を実現できている  
無痛分娩を安全に管理出来るように、ガイドライン安全基準を満たしている  
超緊急帝王切開・母体救命処置法・新生児蘇生処置法を訓練し、実施できている  
NICUが設備され運営されている
- ・分娩費が他院と比較して安く、良心的である  
分娩一時金内に分娩費用を設定
- ・母子同室 全室個室化(差額室料は無料)

家族のふれあいの実現が達成できている⇒新型コロナ感染防止対策で制限  
休養をとりやすい環境を提供できている

- ・立ち会い分娩 陣痛期、分娩期を通して、家族とともに過ごせる環境づくり⇒新型コロナ感染防止対策で制限
- ・小児科との連携強化

《婦人科》 婦人科3分野、腫瘍、内分泌、ウィメンズヘルスケアを網羅している

- ・腫瘍  
がん：婦人科がん全ての癌手術が可能。放射線療法は他院と連携  
内視鏡下手術(腹腔鏡・子宮鏡)：婦人科手術の約60%は鏡視下手術
- ・不妊症は保険適応内診療が可能
- ・ウィメンズヘルスケア 専門医による診療  
女性心身症、更年期障害、適応障害、不安障害、産後うつ病、骨粗鬆症  
婦人科内分泌学、心身医学、東洋医学をバランス良くミックスし、幅広い治療を行っている

## 今後の展望と課題

- ・医療の質をさらに高める努力をします。  
LSC、V-Path-laparosurgery、MEAを導入しました。
- ・新たな命の誕生を祝福できる環境の整備を継続します。
- ・医師・助産師・看護師の数・質ともに向上させます。
- ・2023年度も新型コロナ感染防止対策を徹底します。

# 泌尿器科

## 担当医

○田原 秀男(がん支援センター長 兼 泌尿器科部長)

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／堺市身体障害者福祉法指定医師(膀胱又は直腸機能障害)／医学博士／堺市難病指定医

○松村 直紀(泌尿器科医長)

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医・指導医／日本腎臓学会腎臓専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／堺市身体障害者福祉法指定医師(膀胱又は直腸機能障害)

○浜口 守

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医

## 活動報告

2022年の総手術件数は433件と減少しました。毎年30件以上の結石患者の紹介があった堺市立総合医療センターに、結石治療の専門家が赴任したことが原因と判断しています。その反面開腹による膀胱摘出術や前立腺摘出術を、例年に比べて多く行いました。

2018年度から高度先進医療として始めたBio jetを用いたMRI/TRUS弾性融合画像ガイド下生検が、当院を含む全国13施設での前向き試験の結果を厚生省に提出し、2022年4月で保険適応となりました。

業績面では、松村医師が大阪泌尿器科臨床医学会学術奨励賞ならびに堺医師会学術奨励賞を受賞しました。英語論文も2編掲載されました。

## 今後の展望と課題

- ・泌尿器科医4人体制。
- ・ロボット支援手術器具の購入。

# 整形外科

## 担当医

### ○河原林正敏(病院長)

認定資格：日本整形外科学会整形外科専門医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)／堺市難病指定医

### ○吉岡 篤志(整形外科部長)

認定資格：臨床研修指導医

所属学会：日本整形外科学会／中部日本整形外科災害外科学会／日本骨粗鬆症学会／堺市難病指定医

### ○小松 俊介

認定資格：臨床研修指導医

所属学会：日本整形外科学会／中部日本整形外科災害外科学会／北海道整形災害外科学会

### ○北川 綾美

## 活動報告

- ・当院整形外科では、骨折を主とした外傷の手術に加え、脊椎手術や人工関節置換術にも力を入れています。脊椎の手術は、大半の症例を顕微鏡視下で行っております。人工関節置換術には侵襲の少ないアプローチ法を導入しております。治療を受けられる患者さんの身体への負担を極力減らすべく、当科では低侵襲手術の実践に引き続き取り組んでいきます。
- ・高齢化・併存疾患の重症化に伴い、近年は手術リスクの高い患者さんが増加しております。麻酔科、内科、循環器内科と連携し、必要時には他科との合同カンファレンス、他職種を含めた倫理カンファレンス等を行い、患者さんにとってより良い治療を提案しております。
- ・2022年度の総手術件数は385件、脊椎手術は101件、人工関節手術は53件でした。

## 今後の展望と課題

他院所との連携を行い、より患者さんにやさしい医療・手技を進め、整形外科診療のさらなるレベルアップを図っていきたくと考えます。

# 脳神経外科

## 担当医

### ○田中 禎之(脳神経外科部長)

認定資格：医学博士／日本脳神経外科学会脳神経外科専門医／日本脳神経外科学会近畿支部学術評議員／日本脳卒中学会脳卒中専門医・指導医／日本救急医学会認定ICLS・BLSコースディレクター／日本救急医学会・日本神経救急学会認定ISLSディレクター／臨床研修指導医／共用試験医学系OSCE評価認定講習会修了／回復期リハビリテーション専従医研修会修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)

## 活動報告

- 2022年4月24日：第3回みみはらISLS-WSコース 開催
- 2022年4月24日：第4回みみはらISLSコース 開催
- 2022年6月9日：抗血栓 Web Seminar 講演「これからの抗血小板療法について」
- 2022年9月25日：第79回耳原総合病院二次救命処置コース 参加
- 2022年10月23日：第80回耳原総合病院二次救命処置コース 開催
- 2023年2月7日：Pain Live Symposium 座長
- 2023年3月7日：Osaka Stroke Care Network 講演「回復期リハビリテーションからみたてんかん」

## 今後の展望と課題

- 急性期病院ならびに開業医と連携をはかり、紹介・逆紹介患者数を増やします。
- 脳外科連携病院に、緊急治療が必要な患者さんを速やかに紹介します。
- 将来を見据え脳神経外科専門医、脳血管内治療専門医、脳卒中認定医を積極的に募集します。
- 脳神経外科専門医を獲得できれば手術を開始します。
- 脳血管内治療専門医を獲得できれば脳血管内治療を開始します。
- 脳卒中認定医を獲得できれば一次脳卒中センター(PSC)を申請します。
- 複数名のスタッフが揃えばSCUを設置、24時間体制で脳卒中急性期治療を行います。

# リハビリテーション科

## 担当医

○田中 禎之(脳神経外科部長)

認定資格：医学博士／日本脳神経外科学会脳神経外科専門医／日本脳神経外科学会近畿支部学術評議員／日本脳卒中  
学会脳卒中専門医・指導医／日本救急医学会認定ICLS・BLSコースディレクター／日本救急医学会・日  
本神経救急学会認定ISLSディレクター／臨床研修指導医／共用試験医学系OSCE評価認定講習会修了／回  
復期リハビリテーション専従医研修会修了／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)

## 活動報告

【総スタッフ数】理学療法士28名、作業療法士16名、言語聴覚士7名

【入院からリハ処方までの日数】平均0.93日 2日以内の処方割合91.83%

【回復期リハビリ病棟】50床

【回リハ専従スタッフ数】理学療法士15名、作業療法士7名、言語聴覚士2名

【回リハ平均提供単位数】4.63単位(脳血管疾患6.3 運動器3.7 廃用3.4)

【回リハ平均在院日数】50日

【在宅復帰率】90%

【実績指数】平均43.21点

ICUの超急性期から一般病棟、回復期リハ病棟、緩和ケアと多方面にリハビリを提供しています。

心臓リハビリテーション指導士による心臓リハビリを提供しています。

呼吸療法認定士による呼吸リハなど専門分野に取り組んでいます。

がんリハビリテーションにも取り組んでおり、大腸癌退院時指導用パンフレットを作成しました。

一般病棟では認知症・せん妄対策にチームで取り組んでいます。

COVID-19重症患者に対しても積極的にリハビリ介入しています。

## 今後の展望と課題

2025年問題に向け、今後益々回復期リハビリ病棟の需要が高まると考えられます。

回復期リハビリ病棟では、提供単位数確保のため休日リハビリを継続していきます。

術前呼吸器リハビリテーションが開始され、さらに多くの患者さんに介入していきます。

患者さんに必要なリハビリ単位数を受けて頂くために、さらにスタッフの増員に取り組みます。

脳外科専門医としてスタッフを教育・指導し、質の高いリハビリ医療の提供を目指します。

# 緩和ケア科

## 担当医

○坂本 能基(副病院長 兼 緩和ケア科部長 兼 産婦人科主任部長)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医／日本女性医  
学学会認定女性ヘルスケア専門医／日本東洋医学会漢方専門医／母体保護法指定医／日本がん治療認定医  
機構がん治療認定医／臨床研修指導医／緩和ケア研修会修了

○末田 早苗(緩和ケア科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本血液学会専門医／日本緩和医療学会認定医／日本がん治療認定医機構がん  
治療認定医／緩和ケア指導者研修会修了

○広川 恵寿輝

認定資格：日本内科学会内科専門医／緩和ケア研修会修了

○大竹 典子(非常勤)

## 活動報告

- ・診療の質向上に向けての取り組みとして、オピオイド使用状況を把握しやすいような記録方法の運用を整備した。また、週1回の病棟回診を開始した。
- ・医師体制が常勤2名、非常勤1名の3人体制となったことから、入院依頼に迅速に対応することが可能となった。

- ・これまで実施してこなかったAIDS患者への対応を整備し、入院を受け入れるようになった。
- ・緩和ケア病棟での面会制限の緩和を行い、患者家族の精神面でのサポートを積極的に実施した。
- ・緩和ケア科での研修を希望する他科専攻医の教育を継続的に実施した。

### 今後の展望と課題

- ・患者のみならず家族サポートにも配慮すべく、レスパイト入院を取り入れていく方針である。
- ・早期からの緩和ケアを実現するため、緩和ケアチーム、症状緩和外来を充実させていく。
- ・ポストコロナ社会の要請に応え、病棟でのイベントや家族ケアなど、終末期患者の精神的サポートを更に充実させるための活動を拡大していく。

### 緩和病棟関連資料

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
入院患者数	338	379	317	303	299
延べ患者数	8,209	8,295	7,608	6,945	7,138
病床利用率	96%	94%	87%	76%	78%
平均在科日数	24日	21.8日	24日	23.2日	23.7日

### 紹介先のリストと紹介数

紹介元	件数
院内・法人内	143
堺市立総合医療センター	49
大阪労災病院	11
近畿大学医学部付属病院	7
急性期病院	4
その他	85
合計	299

持続オピオイド使用人数	198名
持続鎮静使用人数	52名
調節型鎮静使用人数	3名

### 入院してから1週間ごとの死亡数

	日数	死亡数
第1週	1～7	63
第2週	8～14	44
第3週	15～21	29
第4週	22～28	13
第5週	29～35	25
第6週	36～42	15
第7週	43～49	6
第8週	50～56	7
第9週	57～63	10
第10週	64～70	1
第11週	71～77	2
第12週	78～84	2
第13週	85～91	2
第14週	92～98	
第15週	99～105	1
第16週	106～112	1
第17週	113～119	
第18週	120～126	
第19週	127～133	
第20週	134～140	
第21週	140～147	
第22週	148～154	1
合計		222

緩和ケア研修会修了者 2022年6月現在 94名

緩和ケア科	末田 早苗	血液内科	奈良 健司	小児科	藤井 建一
緩和ケア科	広川恵寿輝	腫瘍内科	中江 史朗	小児科	五嶋 嶺
総合診療センター	藤本 卓司	産婦人科	坂本 能基	小児科	阿曾沼良太
総合診療センター	松瀬 房子	産婦人科	内田 学	小児科	瀬邊 翠
総合診療センター	安田恵津子	産婦人科	松岡 智史	小児科	瀬戸 司
総合診療センター	大矢 亮	産婦人科	高木 力	小児科	佐藤結衣子
総合診療センター	藤本 翼	産婦人科	瀧口 義弘	小児科	安田のぞみ
総合診療センター	杉本 雪乃	産婦人科	松原 侑子	病理診断科	木野 茂生
総合診療センター	河村 裕美	外科	山口 拓也	組織健診科	松浦 英夫
腎・透析センター	大矢 麻耶	外科	平林 邦昭	精神科	森田 大樹
腎・透析センター	植田祐美子	外科	外山 和隆	専攻医	北川 綾美
呼吸器内科	緒方 洋	外科	吉川 健治	専攻医	坂本 祥大
呼吸器外科	佐藤 泰之	外科	戸口 景介	専攻医	成田 亮紀
整形外科	河原林正敏	外科	中川 朋	専攻医	山田 淳史
整形外科	吉岡 篤志	外科	今井 稔	専攻医	佐藤 孝憲
整形外科	小松 俊介	乳腺外科	小田 直文	専攻医	山口 諒也
消化器内科	岩谷 太平	乳腺外科	碓野 孝治	専攻医	神山 雅喜
消化器内科	岡田 正博	乳腺外科	土居 桃子	専攻医	細谷 聖美
消化器内科	松田 友彦	歯科口腔外科	柳澤 高道	専攻医	池田 光穂
消化器内科	河村 智宏	歯科口腔外科	富本 康平	専攻医	後藤 泰裕
消化器内科	櫻井 史歩	放射線科	岩本 卓也	専攻医	八田 寛朗
消化器内科	池田 響	放射線科	出嶋 育朗	専攻医	黒部 貴子
麻酔科	上原 圭司	循環器センター	石原 昭三	研修医	柿原 知人
麻酔科	杉山 円	循環器センター	鈴鹿 裕城	研修医	國本 汐音
麻酔科	南方 綾	循環器センター	具 滋樹	研修医	田中 友樹
麻酔科	江尻加名子	循環器センター	梁 泰成	研修医	渡部亮太郎
麻酔科	中村 佳世	循環器センター	橋本 朋美	研修医	古川 智偉
代謝・膠原病内科	川口 真弓	循環器センター	鷺見宗一郎	研修医	松本 悠佑
代謝・膠原病内科	岩崎 桂子	循環器センター	宮部 亮	研修医	吉田 和樹
泌尿器科	田原 秀男	循環器センター	南里 直実		
泌尿器科	松村 直紀	心臓血管外科	井上 剛裕		
泌尿器科	浜口 守	心臓血管外科	金田 敏夫		
脳神経外科	田中 禎之				



# 精神科

## 担当医

○森田 大樹(精神科部長)

認定資格：精神保健指定医／日本精神神経学会精神科専門医／日本総合病院精神医学会特定指導医／臨床研修指導医

○杉田 義郎(非常勤)

認定資格：精神保健指定医

○大野 草太(非常勤)

認定資格：精神保健指定医／日本精神神経学会精神科専門医

○原澤 俊也(非常勤)

## 活動報告

外来診療において、精神疾患全般の診療に当たりました。初診患者数は年間58人でした。受診年齢層は20代から高齢層まで幅広く広がっています。対症症例としては、家庭内や職場内のストレス、トラブルが原因の神経症圏が最も多く、うつ病、続いて認知症圏、精神病の急性期や慢性期などでした。他の医療機関からの紹介患者も多く、年間44件ありました。

当院が総合病院である為、院内他科からの診療依頼も多く、コンサルテーション・リエゾン活動も活発に行いました。

また、当院のリエゾンチームには当科医師も加わっております。このため上述のような精神科医師への直接的な個別の診療依頼に応じる形だけではなく、せん妄の患者さんを中心にリエゾンチームとして依頼を受ける形もとっております。この場合には「せん妄ラウンド」と称して、週に1回のラウンド(カルテラウンドを含む)を行いました。このラウンドは、1年を通して実地を継続できました。

また、昨年度からはリエゾンチームだけでなく、①緩和ケアチーム(主に緩和ケア科との協働)、②母子ケアチーム(主に産婦人科や小児科との協働)の2チームにも新たに参加するようになりました。

更には、介護老人保健施設みみはらにも月1回往診を継続しました。入所されている方の精神症状が顕著となった場合の診察を主に実地しました。

## 今後の展望と課題

当院の精神科外来診療の特色と致しましては、「他科との併診」という形の多さが挙げられます。これは、地域の精神科クリニックとは異なり、当院が総合病院であることを反映しているものと考えられます。つまり、「当院や法人内診療所で他科も受診している患者さん」の当科受診希望に対応していくことは、地域のニーズに応えるために欠かせないポイントであるため、今後も実践していく所存であります。

また、当科は病床を有しておりません。しかし他科入院中の患者さんが様々な精神症状を呈した際に、主治医や病棟スタッフと共にアプローチを講じていく、いわゆる「リエゾン・コンサルテーション」にも重点をおいております。「活動報告」でも述べた通り、精神科医師が個別に直接対応する形と、リエゾンチームとして対応する形、さらには緩和ケアチームや母子ケアチームとして対応する形を継続していきます。

老人保健施設みみはらへの定期的な往診は今後も継続していきます。

# 麻酔科

## 担当医

### ○近畿大学からの招聘医師(麻酔科部長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医・指導医／日本ペインクリニック学会専門医／臨床研修指導医

### ○杉山 円(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医・指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／日本心臓血管麻酔学会心臓血管麻酔専門医／臨床研修指導医

### ○中村 佳世(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／新生児蘇生法(Aコース)修了

### ○江尻加名子(麻酔科医長)

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科指導医／日本専門医機構認定麻酔科専門医／日本心臓血管麻酔学会心臓血管麻酔専門医／臨床研修指導医

### ○南方 綾

認定資格：麻酔科標榜医／日本麻酔科学会麻酔科専門医／日本小児麻酔学会小児麻酔認定医／日本周術期経食道心エコー認定医

## 活動報告

2022年度は総手術件数2,064件と前年度1,956件から増加しました。このうち、全身麻酔の件数も前年度1,181件から2022年度1,324件と増加しました。

全身麻酔症例加算取得のため、年間2,000件を目標に手術室の拡充と人員確保に尽力して参ります。

## 今後の展望と課題

2022年度の目標は麻酔科収益の前年比120%アップでした。引き続き常勤麻酔科医の獲得に尽力します。

# 病理診断科

## 担当医

### ○木野 茂生(病理診断科部長)

認定資格：日本病理学会病理専門医・指導医／日本臨床細胞学会認定細胞診専門医／臨床研修指導医

## 活動報告

患者さんが病院に来られて、適切な治療を受けていただく為には、まず、適切な診断がなされることが必要です。その際に、しばしば「病理診断」が最終診断として大きな役割を果たしています。病理診断科の主な業務は 1. 細胞診断 2. 生検組織診断 3. 手術材料組織診断 4. 手術中迅速検査 5. 病理解剖の5つで、特に、がん死亡の2次3次予防について重要な役割を果たしています。

当科では、通常の染色や特殊染色に加え、一定の免疫組織化学的検索(50種以上)を活用し、正確な組織診断がなされる為の努力を行っています。さらに、診断に難渋する場合は、他施設の病理医を含めた検討や学会コンサルテーションなどの積極的活用を行っています。対象疾患は、内科系・外科系あるいは腫瘍・非腫瘍を問わず全ての疾患ということになります。特に、外科系であれば、消化器一般、呼吸器、婦人科、泌尿器の検体が多く、内科系では、肝生検、腎生検、皮膚生検、肺生検、骨髄生検をはじめ一般内科が取り扱う非腫瘍性病変全般も取り扱っています。また、各臓器の一般的な塗抹細胞診や吸引細胞診はもとより、細胞診断が重要な子宮がん、肺がん、膀胱がんなどのスクリーニング検査も行っています。

### [主な検査機器]

1. 自動染色装置
2. 自動包埋装置
3. 自動尿標本作製装置

### [カンファレンス等]

毎週行われる消化器外科、乳腺外科、婦人科および呼吸器外科の術前術後カンファレンスには、病理医が直接参加し、総合的に患者さんの診断や治療方針に関する検討を行っています。また、解剖症例については、定例の院内臨床病理カンファレンス(CPC)を開催しています。

### 診断方法：

HE染色による病理組織診断、各種の特殊染色、酵素抗体染色による補助的組織診断。パパニコロウ染色

およびギムザ染色による細胞診断、各種の特殊染色、酵素抗体染色による補助的細胞診断。セルブロック作製による診断。外注検査として、PDL-1、EGFR遺伝子変異解析、RAS-BRAF遺伝子変異解析、ROS-1、Her2/neu(FISH)やALK-IHC、MSI、蛍光抗体染色、フローサイトメトリーなどの検査を利用しています。

## 今後の展望と課題

新専門医制度に対応するべく、専門医研修病院としての要件を満たす為に、協力いただける基幹型研修病院である大阪公立大学との連携を早期に実現していくことが求められています。初期研修の中で、選択研修としての病理診断科での研修の必要性をアピールし、総合的な医師の育成に寄与していきたいと思っております。

一方、現在、受託を行っている院所については、診断についてのさらなる精度管理、迅速性を追求し、的確な病理診断を提供できるように、随時、努力していきたいと考えています。一方、一人病理医の欠点を補うための方策として①嘱託病理医との連携②基幹型病院が行うカンファレンスへの参加③病理学会コンサルテーションや近隣の病理医のコンサルテーションの積極的活用、④外部機関への免疫染色の依頼、⑤自動免疫染色装置の早期導入などを追求していきます。

また、現在参加している婦人科、乳腺外科、呼吸器科および一般外科系のカンファレンスのみならず、消化器内視鏡部門や泌尿器科など他科のカンファレンスへの参加を具体化していく必要があります。

# 放射線科

## 担当医

○岩本 卓也(放射線科部長)

認定資格：日本医学放射線学会放射線診断専門医／日本IVR学会放射線カテーテル治療専門医

○出嶋 育朗

認定資格：日本医学放射線学会放射線科専門医

## 活動報告

2022年度のCT、MRIおよびRIの総読影数は26,116件であり、翌診療日(翌々診療日)にはCT67%(95%)、MRI93%(98%)、RI70%(96%)の所見の返却を達成することができた。またIVR件数は年間141件であり、シャントPTA、中心静脈ポート、TACEおよびCTガイド下ドレナージ等を中心に各科の依頼に対応している。

## 今後の展望と課題

和歌山県立医科大学放射線科と緊密に連携し、所属医師との遠隔読影システムの運用を行い、一層の所見時間の短縮や内容の充実を目指し、読影量の増加にも対応している。また2020年度からは医局からの医師派遣により、常勤医師1名増員できているが、2023年度には診断専門医1名が着任予定となり、読影およびIVRとも充実するものと期待している。

# 組織健診科

## 担当医

○松浦 英夫(組織健診科部長)

認定資格：医学博士／社会医学系専門医・指導医／日本公衆衛生学会認定公衆衛生専門家／日本医師会認定産業医／日本医師会認定スポーツ医／認知症サポート医／日本結核・非結核性抗酸菌症学会認定医／ICD(Infection Control Doctor)

## 活動報告

健診科の体制は常勤医師1名、非常勤医師2名、常勤保健師1名、常勤看護師3名(非常勤1名)、常勤事務員3名(非常勤6名)でした。また新型コロナウイルス感染症流行のため、受診者の予約制をとった3年目でした。安全に安心して健診を受けて頂けるよう、マスク、手指消毒、検温等の感染予防対策に積極的に取り組みました。

受診者数は、人間ドック2,509名(前年比104.9%) 特定健診1,524名(前年比103.3%) がん検診9,633名(前年比100.1%)とそれぞれ増加しました。

健診後のフォロー体制として、健診当日の保健指導を重点化し、保険指導の実施率は28.9%でした。

また、インスタグラム、フェイスブックなどのSNSを活用し、予約5日前にお知らせメールを受診者に発信して予約忘れによる未受診防止に努めました。

スタッフの研修については、食生活改善指導担当者をはじめ、口腔ケアアドバイザー、ピンクリボンアドバイザー、健康運動指導士、人間ドック健康情報管理指導士の資格を得ました。

## 今後の展望と課題

医療費負担が増大する中で、予防医療の重要性は増えています。受診者の視点に立った満足度の高い健診事業を目指します。

- ・スタッフのレベルアップを図ります。
- ・健診サービスの充実を図ります。
- ・受診者数の向上を図ります。
- ・健診後のフォローアップ体制の充実を図ります。
- ・学術面では学会発表や論文作成に積極的に取り組みます。

# ● 歯科口腔外科

## 担当医

○柳澤 高道(歯科口腔外科部長)

認定資格：日本口腔外科学会専門医・指導医／日本口腔感染症学会院内感染対策認定医・インフェクションコントロールドクター／臨床研修指導医／日本レーザー医学会安全教育講習修了

○富本 康平

認定資格：日本口腔外科学会認定医

## 活動報告

2022年度は外来患者数は8,754名でそのうち初診患者は598名であった。入院患者件数は84名で全例が手術目的であった。さらに他院からの紹介患者数は294名と前年比0.72倍と減少した。また、耳原歯科診療所との連携については、歯科診療所からの紹介患者数は124名で、当院から歯科診療所への紹介依頼件数は158名と連携は概ね順調に推移した。

周術期口腔機能管理患者件数に関しては、周術期の初診患者数は1,267名で手術患者がそのうち約80%を占め、癌化学療法および緩和ケア患者の口腔機能管理件数は約20%であった。退院時カンファレンス(多職種連携)参加件数は106件で前年比0.80と減少した。

2021年度の後半からはリモートでの参加体制を構築したものの、コロナ禍でのカンファレンス開催の難しさが影響したためと思われた。

なお、2022年は日本口腔外科学会認定施設更新の年であったが、無事に準研修施設の更新をすることができた。

## 今後の展望と課題

当科を受診する患者の年齢構成は二極化し、診療の主体を占める周術期口腔機能管理患者は、その多くが後期高齢者の手術患者であり、しかも増加傾向にある。その結果ADLの低下した患者が急激に増加し、病室から外来診療室への移動に介助が必要となることも多い。しかし、近年、人手不足との理由から移動がスムーズに行われず、診療遅延と言う大きな影響が出ている。病棟往診で対応可能な患者さんに対しては、そのような対応を取ることになるが、そうすると一方で外来の歯科医師・歯科衛生士が不足し、その結果就業時間内での診療が困難となる傾向にある。2023年度より0.5人歯科衛生士の人数を増やしてもらったが、元々狭い診療室でさらに、たった2台の診療台で患者さんの診察・治療を行っているため、1日の診療可能な患者数は自ずと限られてくる。働き方改革が謳われる中、診療体制に見合った診療スペースの確保が、今後とも大きな課題である。